

論文要旨

精神障害者セルフヘルプ・グループ
の基礎的研究

－援助関係論の検討－

東洋大学大学院社会学研究科

社会福祉学専攻

博士後期課程3年940004

稲 沢 公 一

1. 研究の背景と動機

社会福祉学において、個人の基本的な人権を尊重することが重要な課題と位置づけられるようになってきている。それによって、これまでの受動的に「与えられる福祉」から能動的に「利用する福祉」への転換が模索されているところである。人権擁護はもとより、ノーマライゼーションの理念や生活の質（QOL）向上にむけての議論は、そうした流れに基づくものであるといえる。しかし、この流れを進展させるための制度および援助のあり方についての研究は、その理論的体系化に向けて、ようやく端緒についたばかりであると考えられる。

一方、現実において、とりわけ精神障害者に対しては、隔離・収容を基本的な方針とする本人不在の処遇が長年にわたって行われてきた。わが国における精神障害者福祉は、マスコミの事件報道などに基づく一般市民の根強い偏見・差別とも相俟って、理念的・制度的・援助方法論的に最も遅れた福祉分野であり、精神障害者本人も、周囲の偏見や無理解にさらされ続けることによって、否定的な自己イメージや人生観を強固にいただくことが多いという状況にある。

本研究者は、精神障害者共同作業所でのボランティア活動以来、精神障害者福祉分野に関心を持ち続けてきたが、修士課程修了後、精神障害者家族の全国組織事務局に勤務し、相談室において当事者家族および本人から直接生の声を聞くと共に、調査活動に従事して全国規模での現状把握につとめ、さらには、家族や本人の主体的なグループ活動や自分たちの主張をアピールしていく運動に直接的あるいは間接的に関わってきた。

そうした中で、精神障害者本人が各種媒体を通じて自らの体験発表を行い、あるいは大小様々な場で相互に意見交換をすることによって、自己や社会に対するイメージを変容させ、新たな価値観を作り上げる機会を目の当たりにすることができ、また、障害や病気によるつらさや苦しみに呻吟しながら、にもかかわらず、自己及びその生を肯定し、積極的前向きに人生を送ろうとする精神障害者と出会うようになった。

こうした背景に基づいて、精神障害を背負いながらも、本人がその意味を捉えなおし、自らの人生を肯定的に受け止めていく契機や要因の解明を研究テーマとしてもつにいたった。博士後期課程入学以降は、このテーマをより包括的に援助のあり方と関連させて位置づけるようになり、利用者の主体性を最大限尊重する社会福祉援助のあり方をテーマに研究を行ってきたのである。

2. 研究の目的と視点

本研究では、精神障害にともなう苦しみ、にもかかわらず、自らの生を肯定的に受け止めていく人生観や価値観がどのように形成されるのか、その過程・契機・要因等を明らかにし、社会福祉における援助のあり方を考察することが最終的な目的とされている。

そのために、精神障害に限らず、何らかの問題や課題を共有する仲間同士が主体的に小集団を形成して相互支援を行っている活動、すなわち、セルフヘルプ・グループ (Self-help Group: 以下SHG) 活動に注目し、そこで行われている援助活動の意義を明確にすることによって、援助のあり方一般を検討するという視点を採用することにした。

というのも、個人的な経験としてであるが、これまでに出会った肯定的な人生観や価値観を有する精神障害者は、例外なく、SHGに深く関与し、それぞれに仲間との支え合いが重要であることを主張していたからである。

3. 研究経過

博士後期課程では、まず第一年度の前半に、入学直前に実施した「精神障害者団体の全国調査」の結果を整理分析し、「活動目標からみた日本の精神障害者団体の現状－1993年度全国調査の結果から－」と題して『東洋大学大学院紀要』第31集に報告した。

第一年度の後半は、主に、SHGに関する内外の文献研究をすすめ、その成果を踏まえて、上記調査結果の再検討を行い、より包括的な枠組みの下に位置づけなおして、本論文第三章の原型をとりまとめた。

第二年度の前半は、文献研究の中で注目するに至ったChamberlin, J. "ON OUR OWN" (Mind Publications, 1977) を精読し、SHGの中でも当事者が主体的に運営する「オルタナティブ・サービス」の思想と実際を整理した。その成果によって、本論文の第一章2節・4節、および、第二章2節を執筆することができた。

第二年度の後半は、まず一方で、Chamberlinの提起した精神障害者差別 (mentalism) の構造をより明確にするために差別論の研究を行うとともに、もう一方で、アメリカにおけるソーシャルワーク理論の動向をレビューし、従来の援助関係における「援助する側－援助される側」という一方的な枠組みに対する反省が理論化されつつあることを確認した。

これらの成果は、本論文でも、差別論研究が第一章1節・3節に、ソーシャルワーク理論研究が第四章に取り入れられている。

第三年度は、これまでの研究成果を整理すると共に、それらを十全に配置するための枠組みを模索しながら、本論文の執筆を開始した。

4. 論文の構成と要旨

経過にも記したように、本論文の素材は、「精神障害を抱えること」「SHG／オルタナティブ・サービス」「精神障害者差別」「ソーシャルワーク理論／援助関係論」などである。そして、これらをつなぐキーワードとして、「アイデンティティ」を採用することにした。というのも、アイデンティティは、一方で、自分が何者であるかということについての自分なりの意味付けであると共に、もう一方では、他者に対する自己の意味でもあるため（エリクソン）、本人の内的な自己把握だけでなく社会的な位置づけをも同時に視野におさめることができると考えられるからである。

これによって、研究目的において提示した「自己の生を肯定的に捉えること」は、「肯定的なアイデンティティを確立すること」と言い換えられて、「精神障害者という否定的なアイデンティティがどのような契機や要因によって肯定的なものとして本人に受け入れられていくのか」という問題を立てることができた。

本論文では、この問題を解くために、二つの方向からアプローチすることにした。一つは、差別論を踏まえ、どうして、また、どのように精神障害者であることが否定的なアイデンティティとして位置づけられるようになっているのかということ进行を明らかにすることであり、もう一つは、SHGがそうした否定的なアイデンティティをもつ人々に対して、どのような意義を有しているのかということ进行を明確にすることである。そして、これら二つのアプローチをつなぐものとして、援助のあり方を検討することにした。

序章では、まず、アイデンティティを求めることが人間にとっては、一生を貫く課題であり、人によってあるいは時期によって問題意識に強弱はあるものの、死に至るまでの関心事であること、また、アイデンティティを求めていく上で、人は、自己を他者との比較関係の中におき、同一性や差異性の中でアイデンティティを確立しようとすること、さらに、そうした比較を他者によって保証してもらおうとすることを指摘した。

そして、ここから「アイデンティティ・システム」という新たな概念を提出し、その規

定を試みた。システムとは、「相互作用し合う要素の複合体」（フォン・ベルタランフィ）であるが、アイデンティティ・システムとは、一人一人のアイデンティティが他のアイデンティティとの比較関係の中で、相互に自らの意味を確認し合い、全体としては秩序だっで位置づけられている様子を言い表した概念である。

それは、一方で、各個人が自分のアイデンティティを確立するために必要とするものであるのだが、もう一方では、一つの秩序として、各人にアイデンティティを押し付けてくるものでもある。というのも、何者であるのかわからないような人は、秩序の中に位置づけることができないからである。秩序が維持されるためには、すべての人が何者かとして規定されなければならない。そこには、何者かであるためにアイデンティティ・システムという秩序が求められ、その秩序が維持されるために、あらゆる人が何者かであることを要請されるという循環構造をみることができる。

問題は、この秩序が維持されるために、特定の人々が犠牲にされ、本人が必ずしも望まないアイデンティティが暴力的に無理矢理押し付けられることがあるということであり、精神障害者とは、まさに、そうした暴力にさらされている人々であるといえる。

しかし、人は、こうした暴力に対して、ただ受け身的な存在であるだけではない。暴力に傷つけられながらも、何らかの対抗手段を考え出す人々もいる。SHGとは、そうした対抗手段の有効な一つであり、その条件としては、①精神障害などの問題を共有する当事者によって構成されている小集団であること、②メンバーが自発的に参加していること、③メンバー同士の相互支援がみられること、の三点をあげることができる。これら三条件がアイデンティティ・システムの暴力に対する対抗手段として、どのような意義を有しているのかを説明することが以下のテーマとなる。

第一章では、アイデンティティ・システムがどのように各人をシステム内に配置するかということを二つの側面にわけて考察した。一つは、何らかの質的な差異に基づいて、各人をカテゴリー化することである。カテゴリー化は、個人に帰属させることのできる無数の属性の中で任意の属性に焦点をあてて、その属性によって、個人を表す、あるいは、個人が自らを表すことである。この任意の属性のみに注目して、他の属性を無視することが偏見であり、偏見に基づいて、その個人を劣位に配置することが差別である。

だが、カテゴリー化だけでは、各人をカテゴリーのメンバーとしては位置づけられても、そのメンバー間の区別を付けることができない。そこで、カテゴリー内部をさらに精密化するために、ライン化という手段が用いられる。ライン化とは、量的な差異を示す何らか

の基準によって設定されたライン上に、各人を序列的に配置することである。ライン上での位置は、各人の能力や努力によって随時上下に移動する。

また、ここでは、上述したChamberlinの入院体験を例にとって、精神医療におけるカテゴリー化とライン化の実状や問題点を指摘した。

第二章では、カテゴリー化やライン化が本人の望まない形で行われた際に、どのような対抗手段が考えられるかを、Goffmanの演技論やエスノメソドロジー、反差別運動の理論などを参照して整理し、再びChamberlinを例に、対抗手段の一つとして、SHGの一形態である利用者運営のオルタナティブ・サービスにおけるconsciousness-raisingの考え方や、それを実現するための条件、および、活動の実際などを紹介した。

第三章では、まず、日本における精神障害者団体の現状を全国調査の結果から概観し、その多様な形態を確認した。次に、同じ調査結果より、メンバー自身による団体の現状把握および将来目標といった意識的な側面を分析することによって、形態の多様さにもかわらず、八割程度の団体に、病気や入院体験を共有する仲間との会話を通じて、相互に自らのアイデンティティを確かめ合い、その中で社会的な偏見や無理解が意識化され、両者のギャップが自覚されていく過程、すなわち「アイデンティティを求めての共同作業」（窪田）と呼べる特性がみられることを実証的に示すことができた。

第四章では、まず、精神障害者のSHGと専門職との関係について、日米の調査結果を比較しながら、SHGが援助者に対して提起している問題点を指摘するとともに、アメリカの地域精神保健において、利用者である精神障害者への認識が「サービスを一方的に受ける立場」から「サービス内容に意見を求められる立場」へ、さらに「サービスを提供する立場」へと徐々に変化している状況を紹介した。次に、援助者の側へと視点を移して、アメリカのソーシャルワーク理論の動向から、strengths perspective、empowerment、constructivismを例にとって、従来の「援助する側-援助される側」といった固定的かつ一方向的な援助関係に対する援助者からの問題提起を取り上げ、従来の援助関係がもつ権力性を明らかにした。

第五章では、日本において行われている精神障害者を地域で支える実践から、「生活支援の思想と方法」（谷中輝雄）を例にとり、援助者が主体となって、援助される者の病理性や問題点に注目し、それらを改善していこうする援助観、すなわち「変える援助観」と、本人の現状をありのままに受け入れ、本人の意向を十分に汲み取った上で、その実現に向けて本人を変えるのではなく、環境や周囲の人々を変えることで足りないところを補おう

とする「支える援助観」を対置させた。その上で、精神障害を「状況に応じて自分を変えていくのに時間がかかること」と規定し、変える援助観がいかにかに精神障害者を傷つけているかということを描き出して、支える援助観に基づく受容的な対応が、逆に、精神障害者自らの変わる能力を最大限に引き出していくことを例示した。

最終の第六章では、上述の考察・調査結果・議論を踏まえて以下のことを明らかにした。

まず、アイデンティティ・システムとは、常に否定的なメッセージを発信するものである。カテゴリー化においては、否定が最劣位のカテゴリーに集中され、他のカテゴリーメンバーが、それとの比較において自分のカテゴリーを少しでも優位なものとして受け取るように操作されている。ライン化では、否定的なメッセージが各個人に分散され、それによって、各人が常に現状に満足することなくライン上での上昇を求めるように仕向けられる。各人が自分の位置の上昇にとらわれている限り、ラインを形成する価値観自体が問われることはなく、秩序を動的に安定させることができるからである。

また、本人を変えようとする援助観は、現状の姿を否定することにおいて、ライン化と同型の構造を有していることになる。

これに対して、自分ではどうすることもできない病気や障害を抱えた者は、ライン上での上昇を断念する限りにおいて、絶望の中で、ありのままの自分と直面することになる。こうした無力な自分を受け入れることは非常に困難な作業であるが、同じ苦悩を共有する仲間から構成されるSHGにおいては、お互いが相手の変わりようのないことをわがこととして熟知しているため、互いに相手のありのままを受け入れる関係が成立しうる。そこからSHGでは、否定的なアイデンティティをもつ自分が他者に受け入れられていくという体験が蓄積され、徐々に、ありのままの自分を受け入れていくことができるのである。

すなわち、SHGとは、否定的なメッセージの飛び交うアイデンティティ・システムにおいて、肯定的なメッセージを発信し続ける数少ない拠点なのである。と同時に、自分たちのありのままを受け入れられ、その姿に誇りがもたれるにつれて、自分たちに対して否定を投げかけ続けるアイデンティティ・システムへの異議申し立ての動機が強められていく場でもある。異議申し立ての過程で、アイデンティティ・システムに押し付けられたカテゴリーは、逆説的に、集団的な同一性を保証するカテゴリーとして主体的に引き受けられ、自分たちのありのままの姿を提示し直す確固たる足場ともなる。

新たな援助関係論とは、こうした肯定的なメッセージを援助者がいかにかにして発信できるのかという問いかけを引き受けることから構築されていかなければならないのである。